母の遊戯及育兒歌
歌及圖解
上

3 0112 099043108

寛政三亥季

獨逸フレーベル著

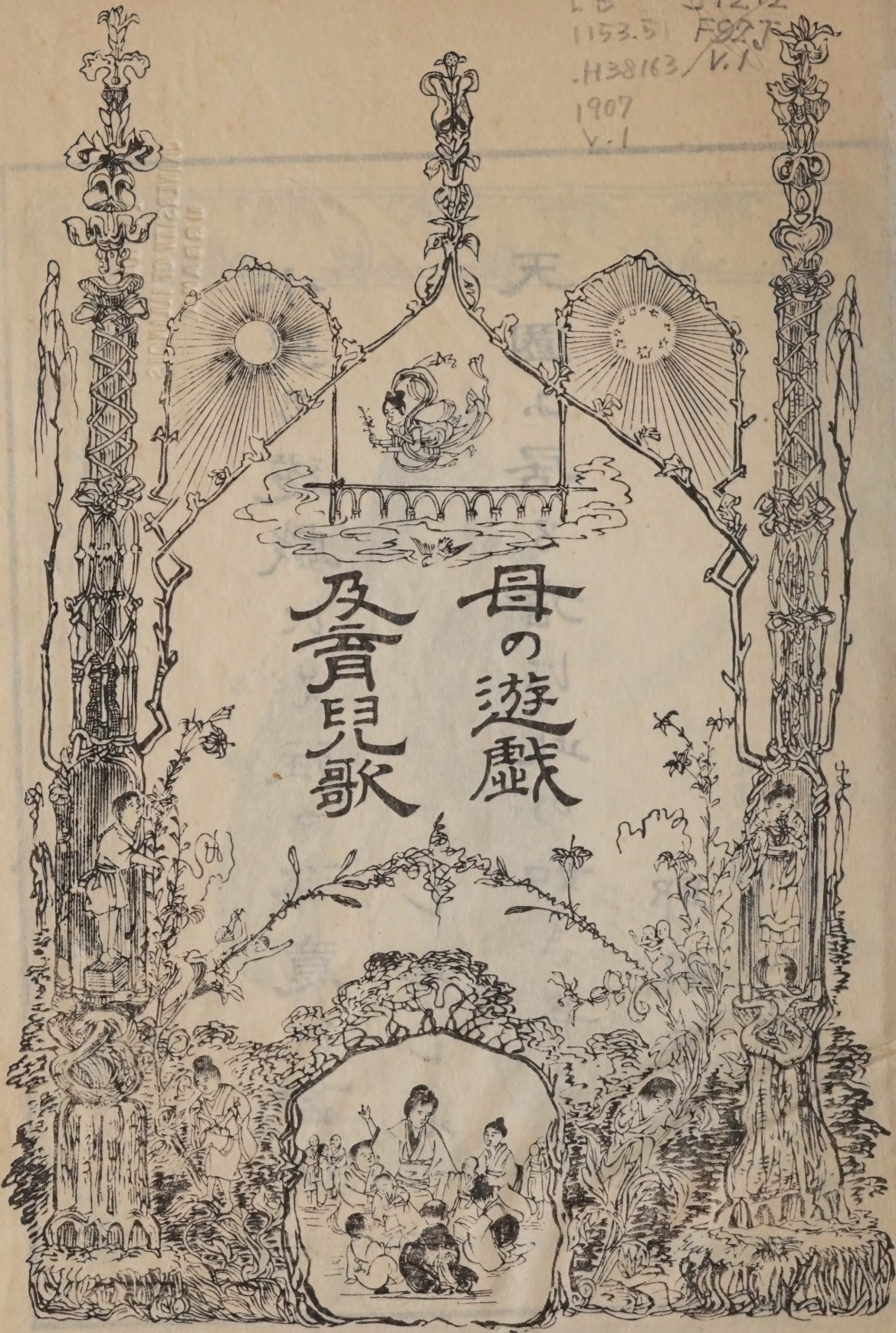
母の遊戯及育兒歌

頌榮幼稚園出版

Friederich Wilhem August
Froebel.

Mother-play and nursery
songs.

v.1.

Kobe, 1907.

母の遊戯
及育兒歌

小兒の遊戯にも往々深意を含む

シルレル

天國に居る者は此の如き者なり

耶蘇基督

母の歌
母の愛
母の遊戯
玉園寫

明確なる思想
高尚なる行爲
敬虔なる心情

再版序

母の遊戯及育兒歌の初版は已に賣切れたれば茲に再版を發行して他日改訂完成の期迄其の要求を充さんとす

明治四十年三月

アンニー、エル、ハウ

序

今日本公衆の前に提出せらるゝ、此「母の遊戯」なる書は幼稚教育に關する幾多の著述中特に卓出せる良書にして保姆は勿論一般の幼兒教育者に向て其事業に必要なる知識を與ふるの好著述なりとす

躬ら幼兒の教育に從事する保姆にしてフレーベル氏の教育原理を載せたる此書の價値を覺知するの晩きは何處に於ても見る所の事實なり、然れども之と同時に此書の研究の進むに從ひ幼稚園事業の愈發達進步し其養育する所の兒童の之が教育を受けざる兒童に比して遙に優るものあるを見るも亦明白なる事實なりとす。從來世に有名なる幼稚園保姆を見るに概して皆此「母の遊戯」を熱心に研究せし人々なり。彼の幼稚園の原理事業の擴張に大功ありて其名を世界に轟かせし獨逸のビユロー男爵夫人及シユレーダー夫人、米國のスーザン、ブロー女史の如きは其最も顯著なる適例なり。余は日本の教育家諸氏も亦此が研究に力を盡され、公立幼稚園の保姆諸氏に向て其原理を啓示せられんことを切望して止まざるなり

此書の深意を理解するは決して容易の業に非ず、然れども是猶ほ寶玉に富める礦山の如し、蓋し寶玉は決して容易に得らるべきものに非ざるなり。彼の黄金を求むる鑛夫が日々勇猛に多くの勞力を費して岩石を掘鑿するが如く教育者も亦宜しく勇健敢爲の氣を鼓して此有要なる奇書即ち彼のフレーベル氏の感慣、勵精、經驗の結果なる幾多の珍寶を藏し、今や文明諸國に於て將に教育上の一大勢力たらんとし、又將に日本にも行はれんとする此奇書の研究に勵精し、其深奥幽玄なる岩窟を穿ち以て其藏する所の驚歎すべき教義を發掘せんことを勉めざる可らず、蓋し其得る所は必ず其勞に酬ひて餘あるべし。今や米國に於ては有名なる保姆學校は何れも此の書を其教課目に編入し、而して既に業を卒へて自ら兒童の教育に從事し居る保姆等も(多の都府に於ては)每土曜日の午前を全く此の書の研究に費し數百名の母も亦相會合して此有益なる著書の研究に勵精し居れり

ブローー女史は曩に標號的教育と題して此書の貴重なる註解を出版せしが、今又此の書の最も價値ある新譯書(英譯)出版の擧あらんとすと聞く、惜むらくは其書此の

日本譯を試むるの前に出でざりしことを。然ども又思ふに其所謂改良譯なるもの、紹介せらるゝに先ちフレーベル氏の原著の儘にて茲に譯述出版せらるゝに至りしは寧ろ喜ぶべきの事なりとす、何となれば凡そ大家の著述は如何程後人の改良修正あるとも到底世人は常に其原著の儘を研究せんと望むものなればなりされど此日本譯亦二の輕微なる點に於て原書と相異なるあり卽ち、第一は圖畫にして原書の圖日本と全く其趣を異にせる獨乙社會の狀態を寫せるを以て譯書には精細に其趣意を取りて之を日本の風俗に改めたるを見る、第二は卽ち樂譜にして此書の樂譜は多く實用に適せざるを以て譯本には全く之を省略せり。是等の二小點を除けば其餘は全く原書と異なる所なし

右の二點を改變するに當りても譯者は頗る躊躇する所ありしが精確に其眞主意を存すれば外形の變化は敢て妨なかるべしと確信して遂に之を斷行したるなり然るに奇なる哉是と同じ思想卽ち普氏の「母の遊戯」を最も有益なる書とならしめんには其精神を取りて之に新裝を加へざる可らずとの思想の現に他國にも發達

なし居るを發見せり。　今より一ヶ月ばかり前の事なりき米國よりの報知に據れば今や英國及獨逸に於て此の書の改譯を企て居る者あると共に米國に於ても亦現にブロー女史の之を試み居るあり而して女史は其改譯に於て全然普氏の原書を直譯せず幾何か改良を加へんとし其然せざるを得ざる理由數條を擧て曰く『元來フレーベル氏は其心中常に幾多の思想を以て熱沸し未だ自覺的に之を曉解せざるに先ち早く既に實行に着手するの習あり故に氏の說明は往々明瞭を欠くことあり。加之氏は詩才を有せざるを以て動もすれば教育學と詩とを混ずるの傾あり隨て歌にも警語（歌の部上段に「母へ」とある分）にも拙きもの少なからず去れば今余が此新譯を試むる主なる目的は是等の缺點を補ひ以てフ氏の眞意を明確に活現せしめんとするにあり』と故に女史は唱歌の部を譯するに當りては詩人及樂師の翼贊を要め以て少しもフ氏の眞意を失はずして之を巧妙なる歌詞に改譯し之に附するに甘快なる樂譜を以てし。而して散文の部は女史自ら譯述の勞を取り以てフ氏の眞意を明晰彰著ならしめたり。女史は其書を二部に分ち第一巻には唱歌、警語、圖畫及フ氏

が特に母並に保姆の爲に添加せる說明を載せ、之に加ふるに女史自身の有益なる緖言を以てし以て此書の主意フ氏時代の思想界の狀態及氏の宗教哲學の梗概を示し、尙附錄として書中の往々論難を惹起す箇條に對する說明を加へ以て特別研究生の用に供し、且つフ氏が詩の體裁にて說述せし箇處の眞意を明かにするため之が散文の解說を添えたり。第二卷には圖畫及樂譜に合はせたる唱歌並兒童の爲の詩を載せ以て家庭及育兒房の用に供せんとせり。顧ふに女史の此新譯書は英語を解する讀者に取りては極めて有益なる書なるべし

此日本譯書は許多の時間、勞力及費金を費して漸く爰に出版の運に至れるものなり、若し此書にしてよく普氏の教育原理を明にすることを得ば其費せし多くの時間、勞力、費用も幸に水泡に歸せずと謂ふべし

余は日本に渡來せし以來出版の事に關し多くの懇篤なる翼賛者を得たり。此書の出版に當りても初より一切の責務を負擔せられ且つ多くの時日を費して親切丁寧に校閱の勞を取られし坂田氏に向て余は今最も厚き感謝を表せざるべからず、

又之が反譯の勞を助けられし大和田、柏木、露無諸氏及原書の圖解の主意を精密に存しながら之を日本風の畫に改むることに助力せられし濱、鈴木の二氏に向ても亦深く謝する處なり。　余は六年前より「普」氏が自ら呼んで自家の教育原理の基礎と稱へたる此「母の遊戲」の「日本譯書」を「見ん事を切望し居たりしが今や始めて其希望は成就せられたり願くは此書によりて世界の人類を一致結合する所の大連鎖の一の鏈環たらしめよ、蓋し吾人は各其國土を異にすと雖も其本性の所要は、一のみ、而して此書は實に其人間一般の要求に應ずる所以のものを包藏すること少々ならざるなり

明治二十八年九月

神戸ニテ

エ、エル、ハウ誌

米國版の序

ピーボディー女史

本書は各國の文學に於て多く其類を見ざる奇書にして廣く此國(米國)母親の需要に應じて齎らされしものなり。フレーベル氏元と日耳曼の産なりと雖ども其精神に至ては四海同胞の見を懷くものなり、彼は各國民互に相食める往日の觀に引換えて諸國の人民が互に相了解し和輯せんとして集り來れる我米國こそ一般兒童の自强性を修養開展して眞正なる自治自導に向はしむるに適したるの地なれと思惟したり。蓋し我國粹を表白する第一の語は『人は皆自由平等に造られたる者なり』と云ふに在り、過去既に然り、今も然り、未來永刧亦然らざるを得ず

母の愛は自由なる自强性の唯一完全なる保護者なり撫育者なり。彼女は凡ての思想よりも更に深き本能に由て能く自己の我意を制し勉めて小兒の眞の從順即ち自ら好んで爲す所の從順を喚起し(世に眞に從順と稱すべきもののあらば唯此種の從順のみならん)以て此自强性を尊重撫育することをなす、蓋し是れ清醇なる幼稚き想像を有する心情より發し來るものなればなり、

母の本能を導て知見に進ましめ、癖性を帶ぶる孱弱より之れを脫せしむるは是れフレーベル氏が兒童の本能自發的遊戲に存する神聖なる意味を研究するに當りその目的となせる所なり。蓋しフレーベル氏の意は母をして兒童の無意識なる遊戲の中に夫の天に於て天使を作りしと同一なる法則働き、加之彼廣大なる軌道に於て遊星を回轉せしむる所の法則が亦兒童の手より飛ぶ所の石塊をも均しく支配することを知らしめんとするに在り。此の如く母は兒童の遊戲をして熱心に且つ豫悅ならしめん爲には自ら全情を以て其遊戲の伴侶たらん事を要し。而して永遠の生涯を導て神の智と愛と力とに交通せしめんが爲には未だ兒童の心中には開展せざるも漸次に秩序ある遊戲によつて開發せしめ得べき秩序の法則を指示し、以て兒童の目的を成就せしむることを要するを見るべし。顧ふに母及其補助者即ち育兒房と學校との間に橋梁を架する所の幼稚園保姆にしてよく此理を曉解し知慮と愛情とにより忠實に之を教育に適用する時は夫の數百千年の間此世を蔽ひし混沌の雲霧は拭ふが如く拂ひ去られ再び樂園を見るに至るべし

或は曰く亞米利加の幼稚園と日耳曼の幼稚園との間には自ら差異なかる可らずと。然れども一般兒童通有の性質に適ふ幼稚園は敢て地方特殊の事情に關する所あることなし。　寛大、自重、禮讓、恭敬、自然の幾何學、韻律的運動、音樂塑像的技術等は凡ての人間に普通なるものにして是實に各國幼稚園を統合均一ならしむる所以のものなり。　且つや本書が日耳曼流の主觀的生活の臭味を帶ぶるは亞米利加風の極端なる客觀的生活に對して實に好對照たり、而して反對の聯結こそは實に吾人が吾人の兒童及び吾人自身の爲めに追ひ求むる所の完全にして平衡なる生活の法則なるなり

第二版獨乙版序

ランゲ氏

フレーベル氏の母の歌は今又其原作の儘に此に世に公にせらる。吾人は屢々本書の唱歌と圖解とは何れも改良を加ふるを宜しとすとの言を耳にせり、吾人も敢て其説を不可なりとせず、然れども退て又思ふに誰かよく之を改作すると同時に其全體に貫通する精神を損する事なくして之を改變する事を得るものぞ、互に連絡せざる物語と圖繪とは玆に要する所に非ざるなり。吾人が今吾人の前に有する所のものは精巧に織り成されたる一の全體なり、日耳曼家庭の生活より取られたる一片なり。吾人は本書に於て地上の生活を更に高尚なる存在の預表と見做すこと、卽ち成人を以て尤も高尚に開發したる者となし、兒童を以て人間なる樹の一個の蕾にして其中に全體の萌芽を含むものなりと見做す所の誠心の實例を見るを得べし。卽ち吾人は母なる者が已れの身よりして神の肖像が人間の形相を取りて出現し來りしを認め、又朽つるものゝ中より不朽なる者を暫時なる者の中より永久なるものを約言すれば人間の中より神の像を漸次に開發する事に關與す

るの特權を與へられしを識認し自ら無上の祝福を受けし事を思ふて歡喜するを見るなり。信仰に由りて彼女は天よりの直接の恩賜として其家子を受け熱愛を以て之を抱き、希望を以て之を看護し、而して其愛子を思ふて幸福を感ずると共に凡ての生命の根原なる神に感謝する事を忘れざるなり。故に彼女は其愛兒の心意を漸次周圍の世界に對して啓かんことを勉め、其愛子の細き手、小さき足、柔かき首に觸れ其四肢の名を示し、先づ其小さき身體に最も近く觸接する物體に對して其將に醒覺せんとする所の心意を指導し、次に人間世界に、次に天然に、及ぼし而して終に天に屬けるものに達せしめんと欲するなり。彼女は彼の面前に解圖を齎らし來り以て神の肖像なる兒童の感情を刺激し、觀念を發達し、精神を開發せんことを欲するなり

兒童を看護し漸次に之を教育するの務は本來自然に婦人に屬するものなり是蓋し特に婦人に賦與せられしものなり、婦人の愛は兒童の生れてより以來常に絶えず之を圍繞し凡て其歩趨を導き之を鎔造するの間に亦新に自ら鎔造するものな

り。婦人は其事業に其經驗を獻げ其天職教育に心情と精神とを委ね死に至る迄忠實に之に盡さゞる可らず、決して辛苦と犧牲とに畏縮す可らず、無智なる世俗の反對輕侮を恐懼す可らざるなり

本書は敢て教育の完全なる方法と云ふに非ず又幼時の課程の形式的統系にも非ず、然れども是實に一個の首尾貫通する根本的觀念に基て組成せられし道義的完全體にして心を開て其感化を受くる者には驚くべき印象を與ふるものなり。健全なる教育によりて凡ての善良なる傾向を喚起する所の一全體なり。心意の救拯を來す所の一全體なり。母たる者にして呶々たる世俗の妄評に介意せず自ら其實際的問題を解釋せんと欲せば必ず率由せざる可らざるの道を指示する所の一全體なり。母たる者は此精神を以て此立脚の地に立ち以て其感化をして有効ならしめざる可らず。蓋し教育に於ける致動の勢力有効の槓杆は唯眞の愛あるのみ、故に母たる者は宜しく本書を以て自己の務の共働者として之を利用し其室家の珍寶として之を歡受すべきなり

母の遊戯及育兒歌上卷目錄

上卷目錄畢

育児歌及圖解

母と子

あなうつくしの我兒や
かゞやきわたる其容
春のはじめの空なして
清き心の信仰よ
住める心の信仰よ
身をおく母のなよひに
きざしそめつ動きて
来れ子どもよ打つれて
光のうちにいざすまん
母の光はあけくれに
愛と望と信仰と
かゝる恵とよろこびを

あなあいらしの我兒や
かゝる容をあたへしに
笑ふひかりは何ものぞ」
身をおく母のふところに
清き心の親愛よ
光をかへもしんあいよ
母が生命にめぐまれて
共見ながし我そばに
兒のひかりはよるひるに
のぞみてやまず界の身に
汝がゆく道をみちびきて
心にふかく知らせはく

智識の光やはらかに
照す光は何ものぞ
王位をきはめて二つなく
笑の眼にあらはれて
かゞやく望よ汝がむねに
かゞやく望の其のげよ
あげあたらしき春の日の
もとめてやまず世の中に
かくて天なるたましひに
高き處に志るべせん

母と乳児

母の獨語

○初生児を見たる母の情

才、神よわが神よ
我を擇ひて妻となし
最も尊きよろこびの
生涯を得させ玉ひけり
その喜に又添ひて
いと大なるたまものを
我に贈らせ玉ひける
天津使のそれに似し
きよき此兒を玉ひぬ

才、わが夫よ汝のたびハ
父となりたる我夫よ
まことの愛のしるしとて
いと美くしき賜物を
與へし神に謝し給へ
初子に見ゆる物を皆
我等二人をとこしへに
一つにつなぐ鎖なり
苦痛を受けて生れしも
今は安けくなぐ母の
膝に眠れやわが兒よ
うき世の浪は荒くとも
我等両親つき添ひて
安けく汝身を守るべし
我等が生命の再興者
世に美くしき冠にも
比べて愛づべき我兒よ

才、神よ我父よ
尽きざる生命の源よ
あはれ我子の生涯も
清く過させ給へかし
今も皆是神の子ぞ
才、我神よ願くバ
我等親子の者をして
一つの糸に結ばれて
神のましまする楽園に
住ましめ玉へ[illegible]とはに

○乳児をつらく視たる母の喜悦

罪なきちごと戯る母よ
遊べる母の喜悦を

母の獨語

誰にハ語るべき
世の幸福ハ唯これぞ
母がねがひハ我ちごを
何の願も又あらじ
我ちごよ
さても汝身も何故に
語を聴せよ其故を
なるゝ汝身なるぞよに
泉の如く溢れきぬ
置て露もおかざらで
まがなばかりの美くしさ
霜の色より猶清き
霞み渡れる春の日も
ゆたけき心の喜悦も
ちのみごの接吻にめぐみし母親の
それよろこびハ限志らずも

愛の光に照さるゝ
優しきめの純情よ
幸なれかしと祈る外
かく愛しく見ゆるぞや
罹なくたちつ躓づきつ
世新しき喜悦も
愛らしき其頭
花の蕾のそれとしも
罪もけがれもまだしらぬ
ひとひの際の氣高さよ
匂へる花のそれならで
唯みちて尽きせぬ

汝が頬は
天鵞絨のやうにやはらかに
薔薇のいろくしく
豊栄登る天つ日の
其白雲なき精神を
かゝる無邪氣の笑顔ぞ
繋がしむべき鎖なれ
初聲挙げし其昔より
少さき人間と思はれぞ
なべての試錬にかちぬべき
かよわきちごの姿にも
若芽ハ既に備はりぬ
萌えし若芽ハ弱くとも
幸己の幹もいとつよく
慈愛の露をおく母の
今我世界ハ昨日より

夏の日中に咲出でし
晴れ渡りたる大空に
光のやうに輝きて
眼の外にぞ溢れ出る
我とは身をいや深く
あはれ誠に我ちごよ
地上の天使の心地して
遂に来らん世の中に
力の基ぞの見えて
包まれてある萌え出し
播かれし種に萌出でぬ
日毎に強く生ひ立ちて
栄ゆるさまぞ見ゆける
喜いかに深からん
ますりて嬉しき曙の

母の獨語

きらゝき光を迎へなり　愛兒の生れ出しより
我身ハ母になりしより　いとよき女となりにけり
ちごを養ひ育つるは　よなよな恵みも悦ぞ
心の限りのよろこびぞ

○稚兒と遊ぶ母

母親が
つらつら我子ら見ますれバ　ますます深き真なる
又うるはしき愉快を　味ひつゝも清恵の
見出すると共に情をも　其一生の最大の
幸福をこそ護らなん
オゝちごよ美しの子よ　汝がため捧ぐる我恋ハ
深さも知られぬ海底に　光かくせる真珠にも
まさりてきよく輝けり　我いのちある記念にて
汝身に之を示すべき　いと愛らしき我ちごよ
小さき頭のつかれなバ　母ハ手をもて支へなん

ちごの額とその眼も　母が心をよろこびと
誇とさへこそ充たすなり　さらにハ紅白をまぜし
薔薇の如き頰あり　静に母の肩によせ
そもおしあてゝ眠るなり　又いと小さき微妙なる
耳ハ聞ゆる音楽の　音に傾けきくならん
こゝにハ小さき鼻ありて　又口もあり此口は
真実の外ハ一言すら　語らざれとぞ願ふなる
赤き珊瑚の玉に似し　此唇ハ何けくれに
我に向ひて密接に　交する事ぞなやむなり
紅色のまるまるき頤　ほゝゑむ毎に和らしき
ゑくぼをつくる頰をも　母ハすべての物よりも
まされて殊に好むなり　露にこぼれん愛嬌を
備へし顔ハ黄金の　髪もて妙に掩はれつ
雪なる頸ハいとまるし　あはれ此母にかくばかり
ありしきものなるべしや　ちごの頭をまもるなる
保たしむるハ此咽喉よ　四方の子を肥えてうるはしく

母の獨語

おもへバぞ接吻せられける　又その背ハ我ちごが
やがて成人せし時に　力を與へん頼もしさ
遊びのためとて作られし　これハ手にして是指
愛子ハ日々にそれぞれの　使ひ方をや學ぶらん
又是こそハ美しき　我幼兒の細腕よ
母に抱かれて暖かに　心地よさをバ感ぜん
さすれ張いでし胸ぞかし　（我兒ハ其身を最上の
健康にこそおくべけれ）　罪なき心ハ靜かにし
胸の中にや憩ふらん　悲哀も苦勞も襲ふなよ
輝きわたる夏の日の　空の如くに或ハ又
をさなき眼の其みの　最初の眺の如くにぞ
かくてぞ生命の源が　乳兒の心の其中に
ひそむとハ今ぞ覺るべし　怒も爭ひ侵すなよ
こゝに二つの脛ありて　獨りで歩み得るまでハ
幾月日をか重ぬらん　肥えて桃色なる足ハ
唯一筋の善道に　乳兒をみちびく願なり

又脚目と両膝も　水の中をも思ふまゝ
徒歩をも乗る事も得ん　玉なす足の其趾も
二列ありて十箇あり　さて今我は悉く
愛子の身体を述終へぬ　やがて其乳兒生ひ立て
ほのかにおぼゆる時来なバ　我がところを飛出でん
他の子供と交りて　心の糧を見出さん
今もや心に其願　萌し初めしを我ぞ知る
我その無言の其中に　是をぞ養ひ育つなれ

○乳兒の發育をし衛る母

日々に生ひ立つ我乳兒を　衛てなうも大神に
母も祈りて言へるやう　「我兒をばけがれぬ身にして
浪風あらきうき世にも　無事にとまもれ大神よ」
されども母の役として　おのれも力をつくすべし
天父の胸に来ながらく　休まん願あるならバ。
来りて見よや我乳兒を　朝日に匂ふ初花ハ

母の獨語

色香ゆかしき其花も
頭ハ圓く美しく
額もいとも滑らかに
丸てれ花雛やまけぬらん
目も輝て耳長く
母の歌をバ其長き
耳に聞てぞ樂しまん
小さき鼻ハうるはしき
花の香にのみむけて
小さき口ハ朝夕に
牛の乳をぞ吸へるゝ
薔薇の如き其頬に
眠る度毎あらはるゝ
ゑくぼのかハいらしくぞ
才美しく輝けり
千萬金にかへがたき
寶ハ乳児よ我乳児よ
其手ハ開き又にぎり
指ハそろひつゝむこと
おぼえそめて結びて
鞠をとりなげめでたのび
おとなしやうに慄ぶり
腕ハ次才につよくなり
上へ下へとふりまわせ
机のよに今いもや
鞠をころがし戯るゝ
遊のまなびおぼえたり
高きみ空に達せんと
あぐる脚ハはねまわぬ
かくあるひろく拳固に
我子のつよくなりゆくハ
唯一の天の御力よ
我よろこびをいかにせん
此我乳児の生涯を
唯みちびきてまもるこそ
母たる我身のつとめなれ
乳児も遂に生涯の
その花盛をうけん時
其身の力をさとるべし
世に氣高くいさぎよく
送らんとせバ自らが
つとめはたらくべきことを
さとらしめてぞ我乳児よ。

○母と其子ところ又ハ腕に抱るゝ子、

幸多きあけくれに
遊ばせながら我ちごを
教へてゆく母親の
そのよろこびハいかなぶん
心の光をてらしたし
人間といふ美しき
花をひらかせためて
養ふ母の幸多さ
日のけのどらにのどやけバ
花ハひらきをとらへんと
そぶた芽ぞ開くる、
わら乳児よ、
そゆる如き眼を開け、
其眼によりて此母ハ

母の獨語

汝が身の心を見透さん　薔薇に似たる口ばして
ほゝゑむ時ハつゞれたる　母の心もなぐさみつ
いでや小さき口を緘せ　母がめぐみを接吻に
よりて追ゝ傳ふべし　いで柔き手を伸し
互に引きて汝が母と　汝をむすべる紐とせん
肥たる腕を我くびに　いざやまとひてかたかに
愛もて我をおせよかし　清けき耳とやはらかき
髪をまとめせよ汝のみハ　愛の光にてらされて
まだけがれぬ世を知らぬ　みどりにしげる夏草の
中に一本さゝまほに　さ百合のもゝなでしこの
花ハのならぬハ美しや　かよわき足は汝が母の
ふところの中に入れおよ　我をば近く汝が居らば
世のうきことはわすれつゝ　唯よろこびをおぼゆなり
母ハあけくれ汝がために　汝がよろこびの其ために
まげみちとめてたゆまねバ　やみよの雲をてらしゆく
何きひろげにゆたふべし　静にねむれよ母のむねに

かくてぞ母子もろ共よ　幸多く安らけく
此世のかぎりめぐまれん、

○母の胸によれる子、

見よ満足と情味にて　愛母の胸によれる子を
アヽ母親によりなむ　本性ハやはらかれぬ
たゞ打見には乳房のみ　またゝの如くおぼゆれど
求むるものハたらちねの　乳よりきよき善心を
受け得んとこそ望むなれ　いつか乳児ハ生立て
(母の辛苦と無言なる　教の恩に報ひんと)
きよけき母の手かより　真理の苧環さぐるらん
母よ子供ハ食をのみ　唯求むるに非ずして
その天然の能力を　追ひつゝもとめつ同情の
心も深き母親の　清き慈愛を求むなり。

手足の遊

母への言、

をさなごの
父よ母よと　まだいへず
たゞはたらかす　手と足を
空氣の中に　おきながら
心にいだく　おもひをば
もらし初めたる　あしたより
母とのあそびは　はじまりぬ
こはこれ天の　母親に
さづけ給ひし　暗號よ
耳目にふるゝ　ものおとは
心のそこに　かくれたる
その生命を　さましつゝ
かしこき遊に　たいむれに
ひそめる感覺　ひきおこし
未來のかげを　もたらしぬ

歌、

つまづきころび　いくたびか
小さき手足は　はねまはる
かくて生命と　力とを
身に得しちごは　いつしかも
胡麻油のたねと　生ひいでゝ
ともしびとなりて　かゞやかん
母のなさけも　夜な〳〵に
我子の上に　もえそひて

手足の遊

起臥の遊

母への言、

たらちねの
母がきづくる
あそびの中にも
思ひをいだき
それがたはむれにも
望をしかと
かくてぞそだち
やがて来らん
なべての悪に
能と智恵とを
慈愛はてなき
そばに遊ばど
危難を其身を

いさゝかの
いやふかき
起臥の
いや高き
よそるなを
ゆくちごは
世乃中の
勝ちぬべき
得るぞかし
母親の
いつとても
侵さまじ、

起臥の遊

歌、

子供はうしろに
母によばれて
よろこびたのしむ
心もやすきき
愛する母の
害するもの
今は後に
母によばれて
身となましひよ
力は母の
愛にぞ常に

倒れたり
又起きぬ
その笑
そのわらひ
呼ぶときは
なしと知る
たほれたり
又おきぬ
のくれなる
かぎりなき
ひらかるゝ、

風車(かざぐるま)又は風見(かざみ)の鳥(とり)

母へ、

をさなごの物真似(ものまね)はじむる奮勵(ほねをり)をいときくやうなる少(すこ)しもおとしめさげしむな同(おな)じき事(こと)なれくりかへし又繰(く)り返(かへ)すを其(その)たびに樂(たの)しみたれず増(ま)さるらん更(さら)に物事(ものごと)ためをてふ心(こゝろ)もおきんとをしへに、

歌、

空(そら)高(たか)く見あぐる塔(たふ)の風(かざ)車(くるま)
風(かぜ)吹(ふ)く毎(ごと)にくるくると
まはるが如(ごと)くをさなごも
可愛(かあい)き其手(そのて)をいくたびか
まはしながらも美(うつ)くしき
遊(あそび)と教(をしへ)を得(う)るぞかし

風車又ハ風見の鳥

みなそんだ

をさなごは
空なる皿と何きさつぶ
つくづく見て皆をべて
たべつくしぬと知りにけり
されども母は子に向ひ
うせしと見ゆる食物も
まことはうせずかたちのみ
かへたることを語げしかば
このをさなごは今はやて
たやすく心たのしまん、
小鳥は我巣見すてゝ
好む野原に飛びされど
空に失せしは非ぞかし
かくはうせしと見ゆるものを
ほかのかたちにあらはれむ、

歌、

をはりたるを
今やわが児もをはりたり
夕食はいまやをはりけり
わが児の腹をみたされぬ
口をたべつることを知り
舌はなめたる事を志る
たべたるものを小咽喉より
まゐりくだれば我子供
今は遊びに餘念なく
身体は強くその頬も
櫻の如くあかくあり
又其顔の白きさと
雪の色にもまさりけり、

皆(みな)をんだ

味の歌

母へ、

天然五官の窓より幼兒を　たづねもとめてたえまなく
教訓の光を與へけり　母は光をみちびかんと
五官の窓より靈魂の　扉をあけてをさな子の
尊き心を天地の　めぐみのまゝにそだてけり
げにも五官は靈魂の　まどにしあれば父母よ
其をさなごの觸れ易き　心のまどに氣をつけて
清き印象のみ留めさせよ　さらば生命のあるかぎり
世の苦も憂き事も　おそれぬ人となるぞかし
さらば生命のあるかぎり　世の樂を身に添へて
望の光にかゞやかん、

歌

をさなごよ
いざ其口を開くべし　いまよき物を味はせん
こゝに熟せしものもあり　このつゆ多き[illegible]

小さき舌を動かせよ　其味はいかなるぞ
言ふうましと言はねども　舌うちならしよろこびて
うちつゞくさまのおもしろさ　あまきをも好むさまと
かほにかたちにあらはして、
をさなごよ
又をさなごよ此まるく　あかき林檎をかみてみよ
子供は今ぞかゝ見たる　されどころびは池水に
春風ふきてさゞ波の　立つがごとくにをさなごの
かほには皺を打よせて　澁し苦しといふばかり
いやさなまりて見えにけり　すべて子供は甘き[illegible]
熟せし物を好むなり、
をさなごよ　これを口にてかみてみよ
今又こゝにかんぞあり
時には苦きものなれど　のみて薬となるぞかし
されど子供はかんぞを　一口のみて吐出しぬ

味の歌

長き短き一生の　我身の上には時として
にがしと思ふ事もあらん　されど心に生命あらば
ふかきめぐみもいとあまく　あまき果となるぞかし、

をさなごよ
熟せぬ果を食ふなかれ　あるは少くみのらざる
くだものこそは上の皮　中のあぢまでみなかたし
若し汝がこれを食ふ時は　いたみのかなしみつぎ〳〵に
なやみの車おし出して　ほろびの谷にまろびなん
されど子供よ父母よ　熟せし実をたべてよかし
いのち力をいたづらに　ついやすことは益もなし
このならざる不熟の実を
食ふな、

香の歌

○香の歌、
母へ、

世の中に
生きとしいけるものは皆　かくれて外に見えねども
生命の力をたもちつつ　いよいよそだつことわりは
ときふきちこのいちはやく　知りて覚らんとぞかし
垣根のばらや野辺の百合花　その色、形、香までも
花にいのちのあればこそ　かくうるはしくさけれ、

歌

わがをさなごはすぎぐの　花の小枝を手折て
其香をばかぎにけり　アヽよきかほりよきかほり、
アヽをさなごよこの花の　香はいづこより来りしぞ
美しき香を神こそは　花びらの中へおきたまふ
眼には見えねど其かほり　四方にみちつつ溢るなり
かかる妙なる香をかぎて　この美しき心を
作り玉ひし大神に　感謝ささげん美しや
あな美しの花の香や、

ちつとちつと

さいはいふ

一生涯を送らんと　心に望む人々は
物事順序にしたがひて　なさねばならぬ幸福の
運命得んとおもふ人　規則立ちたる時を守り
矢よりも早き時間をば　乱さずつかふことをせよ
習慣のなき人は　多くの儲失はん
をさなき時より子供に　守る時間の其値
よく教へなば人となり　たえず嬉しく思はん
時の寶のたまものを

歌、

ゆきつもどりつふりの音　いとも志づかにひゞけども
時をも少しも違へずに　あちこちあちこち絶間なく
ひとうちひとうち動きて　ちつと／＼と前にゆき
後にかへり又前に　寐起する時遊ぶ時
浴する時食ふ時　正しき時刻を晝となく
夜となく告げてさま／″＼の　心づかひを省くなり、
時計の正しくうつ音も　我心をバ新にし
さわやかに強くなす　ちつと／＼ちつと／＼
あちこちあちこち絶間なく　ひとうちひとうち動きて
ちつと／＼と前にゆき　後にかへり又前に
あけてもくれてもちつと／＼　ちつと／＼ちつと／＼、

たつとたつと

草刈の遊

世の中の一ツてふ
凡てのものゝ真理をバ
さとの存する心によびおこし
幼な心にかなわきを事毎に
教ふる事ぞかなめなる
是なかりせばくさ〴〵の
汝がほねをりも効を見ず
高き真理にをさなごを
進ましめんもいとかたし
草刈遊を幼児に
教ふる母も此真理の
端緒をはや授くなり、

歌

清造よ
牧場にいそげ清造よ
これより楽き事はあらじ
味深き牛の乳
牝牛は小舎にさまよひぬ
肥えてやさしき此牝牛
ちゝと「パン」とは幼児の
世の人々がかはる〴〵の
たもつ情に謝せよかし、
栄えつゝある草をかれ
清造どのよかりげさし
小舎の牛にも謝すべきぞよ
おたまどのよも禮申せ
我母よりも禮申せ
禮いふ事を忘るなよ、

栄えつゝある草刈られ
飼草は家に運び来て
与ふる牝牛を養へよ
ためらはずして乳しぼれ
雪より白き其乳汁
身体を養ふものぞかし
まこと試しつ我いのち
牧場にいそげ清造よ
これより楽しきことはあらじ
草かるさいと此禮申せ
乳をしぼりし宿の下婢よ
麦粉をこねて「パン」をやく
かく情ある人々に

草刈遊（くさかりあそび）

雛を呼べ

こどもらが
ちひさき手ふて　雛鳥を
さしまねくなり　愛らしき
遊ハ外ふ　なかりけり
我をさなごハ　花園の
垣根ふあそぶ　ひなとりの
むれのひとりと　なりつゝも
ともふうごきて　かくれたる
いのちのさまを　目の前ふ
見るこそ世ふハ　うれしけれ、

歌

来れよひよこ　こゝふ来て
あそべやひとつ　又ひとつ
来れよ来れ　皆来れ
いざ〳〵遊べ　こゝふ来て

雛(ひな)を呼(よ)べ

鳩を呼べ

喜悦の
かゞやきわたる光線も
胸のおもひの樂しきも
子供の顔を打守る
母の眼にこそ浮ぶなれ
心をこめてたゆみなき
母の心は幽かなる
雲のかげさへ見とむなる、

歌、

アヽ我愛よ　をさなごよ
鳩のそなたに　逢はんとて
あなたに来るよ　いざや子よ
鳩呼びとめて　いへよかし
「親しき鳩よ　御無事か」と

鳩を呼へ

魚

活きたる生命 あるところ
いづく如何なる はてまでも
子等ハ勇みて 集まて
清く輝く ものゝうちふ
いつけがれぬ 心もて
其樂や さとるらん
かくして遂ふ 聖き事
擇む心の おさりなバ
母の喜悦 いかなるぞ
たとへんものも ふかるべし

水清き
山下かげの いさゝ川
かゞやく魚ハ あちこちふ
岩根の水ふ をどりけり
浮びあつまり 一の字ふ
ふるかと思へバ たちまちに
くの字ふ折れて 遊ぶなり

魚

的（まと）

此遊び
深き心のなきがごと
扉の日々に開けゆく
目より窺ひ見る時は
知らぬ心はおぼろなり、
あるは異なるさまざまの
作るが如く或は又
完き一つとなる如し、
我儘きまゝに動かぬや
よく備はりし所には
凡て磨光と完全の
胸を嬉しき悦びに
凡ての事が集まりて
つくづく見ればをさな子は
されば小さき遊びにも
貫ぬく真理はあるなり

見ゆれど若き霊魂の
其有様を知る人の
夢にもまだ人々の
此是れ粗き石の如く
色集りて白色を
多くの物の集りて
それも働と成功を
物に順序と均合の
子供は真善美をさとるらん
備はる見ればをさな子の
をどりやすらん世の風に
一ツの業を仕遂ぐるを
楽みにこそ充さるれ、
至大至高の天地に
汝が道理のとゞかざる

所にまでも標符に
志かぐなりと悟せより
実物をもて教へなば
千度百度くり返し
一の完全物を示すにぞ
活きたる教となるべけれ。
真実堅固の性質を

もはくなりてぞ教ふる
心の底に見せしむる
志かと心に刻まれん、
詞重ぬる夫よりも
深く心を感ぜしめ
正しく完全き行も
やがて作らん疑はじ。

歌

今我は
この木の片を縦に置き
二ツを重ねて孔をあけ
又その板を上におく
的の價をいくばくぞ
木のきれ二ツが金一銭
仕事の手間が金一銭
この的一ツも持たれねぞ、

まづ十文字に横におき
木釘を中にうちはめて
的をぞ一つ出来ませを
これは一ツで金三銭
小さき板が金一銭
金を掛けぬ人々は

的（まと）

菓子揉

誰も皆
一つの工作を　なす時も
共に助けて　はたらくべし
いかに小さき　事にても
おのおのが　つとめをば
力つくして　はたらくべし
さらバしごとハ　時の間に
出来て互に　たのしまん、

歌、

をさなごの
自ら作りて　仕上げたる
ひらたき菓子ハ　さゝにあり
いとなめらかに　出来にけり
菓子やく人ハ　云ひけらく
小さき菓子を　持ち来れ
かまのひえざる　そのさきに
いざその小菓子　焼きて見ん」
「菓子やきどのよ　此菓子を
我子にやきて　給へ」と
かまの小菓子は　忽に
味ひうまく　やけにけり
待間あらせず　焼けにけり、

揉菓子（もみくわし）

鳥の巣

をさなごは
生命あるものを　ながめつゝ
好めるものに　向ふ時も
唯たのしさぞ　見たさるゝ、
おのが心の　想像を
動くを像ハ　何ふても
倦むけしきなしに　いくたびも
思ひ浮べて　樂みつゝ、
かくて生命ある　ものゝうち
殊更愛づる　そのものゝ、
像をしくと　覺ゆるなり、

歌、

山里の
しづけき宿の　生垣に
小鳥は今ぞ　巣をつくり
そこに二ツの　卵をば
いとやすらかに　生みおきぬ
二ツのひよハ　いつしかと
さけびそめけり　ピーピーピー
親をよびつゝ　ピーピーピー
愛する母を　ピーピーピー
さくに呼びて　ピーピーピー

鳥の巣

花筐

をさな子の
愛る花を美くしく
飾りよそはせ　志ばらくも
休ます勿れ　たゆますな
花の數々　つみあつめ
忘れぬされふ　のくばかり
花愛をてふ　何たゝかき
趣味ゆせしめんと　つとむべし、

歌、
其小かご
さゝふ持ちまよ　いざさゝふ
いとゆかしく　うつくしき
花もてそれを　かざるべし
我父上の　誕生日
今日ぞ其日ふ　あたりたれ
此よき歌を　うたひつゝ
此花かご　父上ふ
たづさへ行のん　ラーラーラー
花の色香の　うつくしさ
ラーラーラーラー
いざや祝はむ　我父を
ラーラーラーラー

花籠

鴿小舎

をさなごは
己が心に喜悦を
遊びとなしてつらなるを
鴿は其巣を飛去りぬ
夕になればうちつれて
子も亦楽しき我宿を
長く楽しき日一日
あらゆる遊の外に又
愛する宿に帰り来て
母に告ぐるを上なき
かくて凡ての喜悦は
たえずとめぐりてくるぞかし、

與ふるものは何にても
常に楽しみ好むなり、
子供も野原に出でぬ
鴿は我巣にかへるなり
それと眺めて帰りくる
出で入る種々の生活と
見もし聞もせし事は
幾度となく繰返し
楽とはいと思はれ
花環の如くつきずに

歌、

我は今鴿小舎を　開きつゝ
外にといへば　鴿はみな
野原をさして　飛び去りぬ
かくてたのしく　一日を
すごして夕に　なりぬれば
ふたゝび帰る　はとの小舎
かたくとざして　又さらに
やすきねむりを　與へけり
たのしきひるの　夢も見よ、

鴿小舎

小さき拇指

をさなごよ
一つ〳〵の指の名と
また其指の用ひ方
いざや教へよねんごろよ
かくてあまたの楽しみは
これより得ると知れよかし、

歌、

此指の名ハ何といふ　これハ小さき親指で
まりの如くまるく見ゆ、此指の名ハ何といふ
これハひとさし指にして　野山の花や遠近の
景色を示すを役目あり　さて此指ハ何といふ
これハ最も長くして　まん中にあるなれバ
中指と名づけられ　また此指ハ何といふ
指環をはめる指なれバ　ゆびわ指とも名づけり
此指の名ハ何といふ　一番小さき指なれバ
小指といふ名を得たりけり　五の指ハかやうにて
各異なるはたらきを　なせども固く結びあひ
一の心のいふまゝに　おの〳〵務をはたすなり、

此小さき拇指

指遊び

をさなごは
ちいさき指を動かして
指の遊びをなすぞかし
かくて遊びハをさなごの
指の力も指つよに
心の力もいやまさむ、

歌、

両方の手を前に出せ
拇指と他の指を
みなしともに折りまげて
をはやうといへよ
拇指とは指と
な一指とひとさし指
指わゆびもろともに
をはやうといひなら
みなまへにかゞめつゝ
禮義よく美しく
おしきさせよ我指に
よろこびいつねま
わしぎみぞともなふ、

指遊び

玉園

祖母(ばば)と母(はゝ)

をさなごは
生(うま)れ落(おち)てより　ほどもなく
小(ちい)さき部分ハ　一(ひと)ツなる
全(まつた)きものに　和(くわ)すといふ
事(こと)をたゞしく　さとるなり
老(おい)も若(わか)きを　一(いつ)家族(かぞく)
同(おな)じ一(ひと)間(ま)に　集(つど)ふ時(とき)
ちごにそれ〳〵　教(おし)ふべし、

これこそは　おばあさん
これこそは　おぢいさん
これはとゝさま　これハかゝさま
おまへハ可愛(かはい)き　母の子(こ)ぞ
家族(かぞく)ハすべて　此(こゝ)にあり」、
こは善良(ぜんりやう)の　母にして
是(これ)を歓(よろこ)びの　満(み)ちし父(ちゝ)
されハ脊(せ)高(たか)き　兄(にい)様(さま)ぞ
これも人形(にんぎやう)を　すく姉(あね)様(さま)
こは皆(みな)様(さま)の　愛(かはい)する坊(ぼう)
大人(おとな)と子供(こども)　とりまぜし
よき家庭(かてい)をバ　見(み)よや人(ひと)
日々(ひび)につとめよ　そしさらけよ
其(その)喜悦(よろこび)の　盃(さかづき)の
あふるゝまでに　こぼるゝまでに

祖母と母

小さき拇指一ツ

物の数

算ふる事にハ人々が
あまりおもみをおかずして
感ずる事もうすけれど
いとも貴き術にして
心をとめて見る人を
其必要をさとるべし、
くはしく正しく算ふる事ハ
善と真理に導くをべぞ
悪に打かつ力さそ
日々にあらそふ善き道へ
すゝむるわざとなるぞかし、

歌、

小さき拇指まゝに一ツ
人さし指で二ツなり
中指で三つ指環指
是で四つよ其次の
小指で遂に五つなり、
あくて其指握まつて
共に寝床へいざにはん
眠れや誰も起すによ
言にかけぞ蛇指に
明けても早く起すなよ、

小さき拇指一つ

指(ゆび)ピヤノ

兄弟姉妹、

「さらばこの
いざや臥床に急ぎなんと
合せて母の膝下に
「母親よ
天地暗く静まりて
神は眠らで守り給ふ
汝が願は聞かれんと
害と恐のあさましき
事なも深く信ぜよし
彼等は一つの生命に
いとも尊き限なれ
外には父とならおらし、

祈のために小さき手を
ひざまづく時」
世界の夜の眠る間も
事なれば深さを知らし
幸福汝をまもらんけ
道より子供を護り給ふ
ちごらに教へ授け給ふ
結ばせるて真理なそ
式真理より善き教

歌、

見よやさしき今こゝに
心安けく眠りけり
働き遊びつかれたる
再び力を得るとなし
慈愛の母と諸共に
すべて生命の父上に
さらば我子等安らかに
君は誰彼の差なく
眼はすべて閉ぢにけり
愛の臥床によく眠れ

たがひの腕にもたれあひ
兄弟姉妹もろともに
甘き休み時至れば
つねに眼を閉づる前
天地宇宙の創造者
祈のつとめを終りなり
とく眠れ「守りませ
呼ぶ人々には答へ給ふ」
心の宝のちごどもよ
眠りて静によく休め、

兄弟姉妹

塔上の子供

是迄ハ
別々に遊びしが
それをも忘れて唯ひとり
又打むれて友達と
なほしもやすき心、
いと美しく見ゆれども
ちほ我もほしさに余多を
集めて見るこそ
たのしけれ

今ぞ一つに打ちつどふ
遊びを娯しむ子供等も
よりつどふ時の花は
唯一輪の薔薇の色
あつめし色の花環ぞ
子供の遊もすべて皆

歌、

両の手に八つの指
これぞ二人の祖母
今またふいであひて
あなよくきませりよくこそと
すぎし遊を語り合ふ

其両端の拇指ハ
共に久しく別れしが
およびし一つあいさつを
一禮をなせば諸共に
父に贈りし花のかお

鳥の卵や其ひよこ、
舞ふ水に浮ぶ魚
兄の給ひし一枚の的
くりかへし一つゝ諸共に
指は言へらく「是よりハ
されど二人の祖母
入口近く出で往きぬ
あまりに高く登る故
空より落ちし如くにて
ふかさも知れぬ穴の中
「そのため指もくだけしぞ」
祖母ハ無事なる指を見て
低くかくれし穴倉の
みな諸共にうたふやう
いでこれよりハ注意せん」、

いではくる小舎の鴿
パンや焼きしうまき菓子
是等の遊を更に又
次の遊をたづねけり。
塔の上にぞのぼらん」と
「否よ」と答へて會堂の
指は登れり塔の上に
其頂見えざらんとせ
今こそ下に落ちにけれ
塔くだけて落ちにけり、
「否たゞそれハ家なりけり」
二人ながらに喜びぬ
中より指ハはひ出でゝ
「ふたゝびハ命ひろひつ

塔上の子供

幼児と月

歌、

月を見よ
来りて我児月を見よ
はやあらハれて遠近の
光のあまりにあふれけるをバ
来ませよ月ハ遠方の
我児のそばにいざ来を
空なる家をふり捨て、
我身の光ハ夜もすがら
此我光我愛を
まなし我ハ空に立ち
いざやこのハさん今宵より
さらバよ我月我君よ
なべても愛の外ぞなき、

月もかなたの山の端に
景色さやかにてらしゆく
夜も晝とぞ思はるゝ
ねむれる森を打越えて
「我ハあまりに遠ければ
そこに行くとかなハねど
そなたに送らん我子供
うけてかしこき子となれよ
汝が行末を守るべし
やさしき愛をもろともに」
うけたる愛の言葉は

幼児と月

玉圓

童と月

遥かなる
み空のもなかを何故に
近くさやけく思ふらん
深きちかみを結ばんと
それぞ小さき児子の心
小さく雄々しき想像を
幻象をそれとし置きて
まことのちかみを知る迄は、
内部の結ばるべき
想像の家を壊つかよ
智恵なすべきなり
夢路をむすばせて
ならぬものぞ」と告ぐるかよ、
おそれの念まで出でぞ
天の高みにのぼさせて

童の心はかくぞかり
遠き空の高みを見て
望むは何の故なるぞ
開く助となる教ぞ、
攪すをやめておもしろき
真の思想を得る迄は
外界に見ゆるものより
其時まで尊らしき
かゝる思念は幼児の
さらば童の尊らしき
「すべての高みは見ゆる如く
童は空を近しとし
かゝる童の其腕を
楽しき夢を結ばせよ、

歌、

をさなごは
慈愛の母に手をひかれ
み空に昇る月を見て
手を伸して指ざして
見玉へ清きあの月を
梯子あらばのぼりなまし
「何處に行きて求むべき」
心濁らぬ顔をもて
何より見ませし傍の
それと見るより起びて
「梯子を爰に持て来よ」と
童の罪なき想像は
月にやつひにできけん、

家の門まで出で来る
清き光や慕ふらん
母に云へらく「母上よ
我手をあれに觸れなば
天までとゞく其梯子
空に達せん信仰の
志ばし考へやがて幼
壁にたてたる長梯子
小さき腕をうち伸し
いと聲高く叫びたり
大空高く登りつ

童（わらべ）と月（つき）

少女と星

をさなごは
いとうつくしき　ものゝうち
類もあらぬ　よきものを
我最愛の　たらちねに
くらぶることを　楽しみとす
是ぞ活たる　画姿を
近く與ふる　道なるよ、

少女子ハ
晴れてさやけき夕暮に
遥けき空を眺めつゝ
楽しく叫び云ひけらく
父と母との星ならん」
「二つの星ハ輝きて
み空をてらすあの光
志るしとなりて歓を
されど輝くあの星ハ
星の群居に圍まれて
事も時にハあるぞかし
おぼろに霞むことありとも
黒白もわかぬぬばたまの
汝よき手本をかの星に
汝が行く道ハ迷ふまじ
生命の道のみちながら
誘はるとも迷ふなよ
道を歩みておこなふ、

母と打つれ門に出で
二つの星に眼をそゝぎ
「あれに並びて出たるハ
母ハ静に教へけり
御身が心を楽まん
お身をしまする生色の
平和の景を示すなり
光も薄く数されぬ
すぎなく道をさぐらる
よしや時にハかの星の
清き光を放ちつゝ
暗のかげをバ照らしなん、
授このるならむ生涯の
お身が送らん行末の
小さき光にいかばかり
静に潔き一筋の

少女と星

壁ふ映る影鳥、

早くより
汝が子ふ知らせ　此真理
その同と心をなぐさむる
ものを残らで　其手もて
捕へられぬといふことを、

歌

小児、
「愛らし小鳥よオゝ小鳥　壁ふとび来るオ 鳥よ
愛らし小鳥よオゝ小鳥　我よぶ間やとまりて
なとれば遊び飛び去るふ　愛らし小鳥よオゝ小鳥
我よぶ間ハ動くふよ

母、
「小鳥影ふそうまれなり　指さしてものと捻らばぞ
好むまゝにとびあそび　壁の上下のけりつて
汝が心をそだたのしまん　見よや汝が何く人生の
正しき道のみちながら　汝を誘ふ快楽も
影の小鳥ふ異ならで　心ふとめて思へかし
財寶ばかりを慕ふ身ハ　なほいや高き歓悦を
知らぬといふの外ハなし　このことはりを悟りなバ
寶も心のたのしみも　皆汝がものとなるべきぞ、

壁に映る影鳥

兎

ともし火の
かゞやく時ハ白壁を
かくて手もて造りたる
間に置きて見る時ハ
生物の影ぞうつりける
ふしぎの事と思ひつゝ
小さき指をよく用ひ
かゝる子供の遊こそ

さへぎる影もかはりけり
形を壁と燈火の
其白壁にうつりしと
子供ハそれをながめつ
いざや汝が子に教ふべし
生物造る其術を、
尊き技術のもとゝなれ、

歌、

見よや見よ
走り跳越すあの兎
子供ハあとを追ひかけバ
見よや小さき耳を立て
今は草葉を食ひつ
かせ又鼻を上に向け
あれのしまに蹲踞り
獵師ハ下に身をひそめ
山風さつと吹き下ろし
勇む獵師ハ敗られつ
さて我歌も終りけり、

壁によりしかの兎
兎ハかふくに逃げ去ぬ、
意なき物音に注ぐなり
小さき背を高めつ
疾くもとへと飛びゆきぬ
静にかげをかくしたり
まちふせせんと待居たり
かくれ兎ハわびはてつ
バネーハ急ぎ走せ去りぬ

兎（うさぎ）

狼

荒野に吼ゆる　狼も
森に眠れる　猪も
たゞをさなごは　何にても
生物の画を　好むなり
猪狼の　ものがたり
母より聞んと　耳立てゝ
待つもたのしき　膝の下
虚しく清き　心もて
あらきけものゝ　物語り
打聞く子供の　其顔を
つく〴〵なかむる　母親の
心の底に　限りなき
愛の泉や　流るらん、

歌

狼

奥山の
小暗き森の下かげを　遠近求食る狼ハ
いかなるものかかぎつけし　うゑハ烈しく彼の身に
逼りくて苦しめぬ　そを凌がんと草分けて
探る果実は狼の　餓ゑたる腹に甘からで
求むるものハ肉血のみ　求めつゝびつゝ森深く
尋ねて奥に駆けりぬ　されどもいかに生き物を
好むといへど猟師ハ　逢ふを中々なさゞらん
猟師ハおほも狼の　餓ゑ如くに目を向けて
森の遠近さぐりけり　かくと見るより鉄砲を
此狼に打ち向けて　ドンと一発放ちけり
あはれやしばし足早く　森より森と奥深く
遠くのがれて叫びつ　又もかくれにさるなり、

狼（おほかみ）
玉園

猪

歌

猪

奥山乃　みどりに深き森の中
遠近あさる猪は
いかなるものか　かぎつけし
餓ゑたる腹を　みたさんと
木陰につもる　どんぐりを
拾ひたしにみ　食ひ居たり
かゝるところに　かなたより
小銃の音は　響きけり
今や猟師ハ　あらはれぬ
猪は早くも　にげ去りぬゝ

猪

小窓

窓にさし入る日の光
子供の五官にふれしとき
其心こそうたれたき
学をもて打たれたり
透明る光のうちにこそ
すべてのものは住みにけれ
清く尊くまさゝとふる
子供の生を送らせんと
労するこそは母親の
いとも貴き務なれ、

歌

輝く小さき窓を見よ
窓は光をみちびきて
たのしき堂に満しけり
窓は終日輝きて
汝に愉快を与ふなり
オこそさふごよ我愛よ
あく明らけく清らけき
光にならんとつとめよや、

小(こ)窓(まど)

窓、

たゞひとり
世に住む我の觀念を
世界の中に唯一人ぞ
其一部ぞと知らしめよ、
通して内にひそまれる
童が眼を誘ふなる
幼心にはいと深く
外の耳には聞えねも
譬喩となりて種々の
かゝる教の言の葉を
又むづらふも生涯を

幼な心に起さんな
さまぐなる生涯の
外にあらはるゝ現象は
真理までをも見せよかし
遠く遙けき眺めぞ
感動せしむるものにして
心の耳に解せらる
貴き教を語るなれ
解せる子供は樂しくも
幸ひ深くぞ送らまし、

歌、

格子窓より大空の
光は曰く「吾は汝と
汝は樂しく思ふらん」
すなはちそれは愛の光
なりと思ひ迎ふなり」
知るかや我は天津日の
我をさがして逢むとぞ
近しと思ふ我心
此光をバ用ひなよ」

清き光は入込みぬ
共にあるなり、そなた我れ
子供は曰く「あら、我よ
のぞや汝の來るをバ
光は曰く「をさなごよ
住所より降りて來りしを
ながきみ空の路程も
いとはずあゆむくらに

窓
まど

炭焼人

わづかなる
もちくおこたりも　いつはらぞ
多くの仕事には　世にはなす
又くるしみも　いつばかり
見えぬ處に　かくるらん
あられて知れぬ　こころこそ
尊き仕事は　住むもれを
さらば子供よ　炭やきの
身より教を　受けよかし、

足曳の
深山の奥の松かげに
あるよ小舎の小さくて
小舎こそいかに狭くとも
うき世の様も白雲の
炭とちかひてぞ営むとき
食るお道具も造られじ
森に炭やく父と子が
水に洗ひて鍛に散る
たゞひとつ人々の
心よりせば朝夕に
誰が作りて焼ふべき
善き炭焼に禮をいへ
食ひも楽みらんのらん
いのちまけて黒くとも
心白くあるもそれを
いで子供等よ善き教へ

炭やく小舎で獨立つ
二人の外ハ入あらじ
心継ぎしきおやと子が
かゝる深山の木伐りて
鍛冶師も炭をもやさずば
人に知られぬ山かげの
煙に染みし黒き顔
煤ちりはらふいとまなく
いやしと思ふ此仕事
我等がつかふ食匙ナイフ
来れ子供よここに来て
汝がよきさじのあくりせば
炭やく人の顔の色
黒く見ゆれば見ゆる程
清く尊き其心

炭(すみ)焼(やき)人(ひと)

大工

善く出来し
工作を見れば　をさなごの
心はそれにひかれつゝ
ながめしてつくづくと
智恵の眼を打ひらき
外形に見ゆるかたちより
見えぬなかまで思ふらん
如何なる用をなさむとて
作られしものを思ふらん、

歌

あくるより
入日かげろふ夕まで
いとかしきなる仕事して
雲に聳えし深山樹も
物も短くきられけり
丸き平たく粗きもの
されど大工のはたらきは
多くの材木集めつゝ
家をつくりて幼児と
害あらせじと守るなれ
大工の造りし家の内に
よけて暮さむ幸を
このよき家を与へたる

終日働く人を見よ
絶えず働く大工をみよ
ひくゝたふされ長かりし
曲れるものは直くなり
いとなめらかになりにけり、
これのみならず築くなる
一ふしの世てうつくしき
昼夜のほねく気をつけて
其父母をも住ませけり
雨も嵐も雪霜も
心にとめて忘るなよ
大工の労苦をしるなよ、

大工（だいく）

橋大工

右と左にはなれたる
二つのものをつぎ合はせ
一つになさんをさなごの
遊のうちに巧てふ
尊きわざを覚るらん
はなれしものを合はさんと
小さき心を打ちくだき
思ひわづらふ時にこそ
智恵も進みて人らしき
其熟練ハあらはるゝ、

歌

谷あひの
水音涼しき夕まぐれ　子供ハ母に手をひかれ
晝のあつさを忘れんと　すゞみがてらに出でにけり、
底もみえなく真清水に　くゞる岩間を打越えて
かなたの岸にさく花を　手折らむものと思へども
力及ばでいたづらに　眼を幹や端々に
さすがハ見るぞ悲しけれ　今や遊べ子供等よ
かなたに来りし橋大工　杖と棒とを二つ三つ
組合せつゝ汝がために　軽き小橋を造るなり
いざや子供等喜びて　心のまゝに其橋を
わたりゆきつゝかへりて　大工の熟練をほめよかし、

橋 はし

家畜小舎の場の門

母親よ
子供と語り遊ぶ時
多くの真理を教へよや
收め得しとしその寶
資産とありて残るぞ、
身に歓を與ふる此ハ
ゆめいたづらに失ハで
よき習慣を得るぞよし、

子供が自ら悟り得ぬ
よしや学びの當世に見えざれバ
子供が長き一生の
さらバ子供ハ夙くより
心をこめて貯へつ
行末長く保存つゞふ

歌

さはそも何ぞ是をみれハ
園ハ駒のとびゆけり
子供の與ふる豆を食ふ
があ〱ぎい〱鳴くもあり
さけろこうとなくもあり
ぶん〱と飛びまはり
もう〱鳴きて愛らしき
あちこちさまよひ騒ぐ又
家畜の小舎の場の門
一も外に失ふな
無益物をしらぬなり、

家畜の小舎の場の門
ひと〱と嘶くもあり
鳩鴨鵞鳥のむらがりて
雛ハぴい〱親鶏の
蜜を集むる蜜蜂ハ
乳ぼらるゝよき牛ハ
小牛ハ遊び子羊ハ
まぐさ食ひつゝありけり
かたく閉ぢて生物を
滅亡の門を打開き

家畜小舎の場の門

花園の門

歌

爰に見ゆるハ何ものぞ
花園に入る表門
此花園を守るなり
強きも細きもなべて皆
生きたる如く栄ゆるなり
見上るばかり脊高きも
芽を新らしく出し法く
花は今にも綻びん
此花園の表門
花を誰にも乱さすな、

これなぞ色香もさま〴〵の
善き植木屋ハまめやかに
美しきもかよわきも
唯植木屋の力にて
露滴てかうばしく
かつらや蔦のはふ枝も
八重に一重にさま〴〵の
色も香もさま〴〵の
かくとざして愛らしき

花園の門

小さき植木屋

生ある物を愛護する
心を子供の胸の中に
養ひ立てんと思ふにそ
けくに並ぶるさま〴〵の
生ある物の有様を
こくと示すに如くハなし、
内なる生命を愛護する
事を学バせ習はすにハ
子供に手近き植物を
育つる楽喜悦を
知らせる事こそ可なるべき、

歌、

花園の
蕾ハひもを　解きにけり
志をれ草葉に　そゝがんと
我等ハ如露を　もち出でぬ
其花びらハ　一つづつ
開けゆきつゝ　かぐバしき
香をこそ四方に　はなちけれ
可なうつくしき園の
我骨折りに　むくひつゝ
いとあたゝかく　てらす日の
光のうちに　そだちけり、

小植木屋

車匠

人の手を
いつも用ひて　かくばかり
善き仕事をバ　志とげしと
知りたる子供の　胸の中
たゞよろこびにぞ　満たさるゝ
たゞおどろきにぞ　みたさるゝ

歌、

やよ幼児よ　まろとともに
いかなるものを造るかを
彼等ハいかゞ骨折るよ
曲げをつりかふめらかふ
かれらハいかゞ骨折るよ
また其軸ハつらぬかれぬ
今よりたえずまハらはし
たえずやまずまハらはし、

車作ハ其手もて
いざ見やかむ見ならむ
手に取をもてる大錐を
正しく孔をつけむとて
何れ見よ車の輪ハ出来ぬ
車ハくるくるまハるなり
然ら今よりくるくると

車匠（くるまつくり）

小木匠

世の人が
様々変りたるいろ〳〵の
業をそれ〳〵為す事も
子供のもバやき眼に入りて
見のがし事こそなかりけれ
唯何事も見る如く
仕遂ることハ易からねど
唯これよりぞ生涯の
よき教訓も得らるべき

歌、

シツシツシツの音そろハ
いで机を工合よく
おもての平らぐ夫迄ハ
心のまゝにけづるなり
シツシツシツの音そろハ
いとも丈夫に椅子を
すべて真白なる迄に
長く長く又長く

朝夕さらく小木匠
作らむものと板をとり
孔のなくなる夫までハ
長く長く又長く
朝夕はさらく小木匠、
作られものとけづりつ
きず目の見えぬ夫迄に
削らる椅子こそ丈夫なれ、

小木匠

武夫と悪児

人ハ皆善を愛する者ふして世の善人ハ丸て皆少しの悪すもおゝろづく此ことわるをいとはやく子供ふ知らしぞかなめなるさらバ生涯のよろこびはいので彼よりはなるべき

歌、

丈の武夫ハ馬ニ乗て　城の門より入来る
「善き武夫よ御身ハま　何故こゝに来ませしぞ」
「善き子見んとて来り　いざ其善き子を見せよ」
「何、武士よ善き人よ　我が悲しき物いかにせん
御身ふ我子を今さらふ　見せざる事の悲しさを
我子ハけさは何となく　機嫌わるくて泣き叫ぶ
家中さわがし大聲ふ」
「あゝ我心をいたむるよ　何ゝ我今は汝がためふ
たのしき歌をうたはざらむ　かなしむものゝむかしものゝむ
善き子のかへるとくりのむ」

武夫と頑兒

隠れよ我児

をさなごに
善を識別する力
養はしむるぞ急務なる
善をば多く積みぬれば
其楽もいやまさん

歌

あれ見よ五人の武夫は
馬をならべて馳せ来る
彼等は我子を要めつゝ
伴なひ行かん為ならん
隠れよ子供ものかげに
在所を彼等に知らすなよ
たゞ願はくば武夫等
寸時もたゞにとゞまるな
我子のたゞに見えざるは
さだかに知を得し事ならん
飛びつ駆りつ往き過ぎぬ
いざ身をあらはせ我子供
さらばの詞をたゞに言へ
はや武夫は影もなし

隠れよ子

迷藏

何故に
迷藏をする時に
幼き胸にもひそむなる
かゝる遊に幼兒を
其名呼ばれて我なりと
この喜悦の原由なれ、
心用ひてする時そ
進歩を得るの道となる、
倚頼の念は幼兒の
此念にぞ未長く
艱難危險に遇ふなび

我をはよろこびいさむらん
箇人性てふ觀念よりぞ
娯ましむる原由なれ
答へんとなる意識こそ
かくれんばうの此遊
生活上の新しき
今やさしき信任と
心の中におき初めぬ
生涯の間住みのこり
勇氣を與ふる力なれ

歌、

かくれよ太郎いざられ
我が最愛の幼子は
何處に居るぞ幼子は
さてもかしこにさがしたり
何處に我子はあるやらん
あはれ嬉しき感謝もて
ア我兒はかしこに居たり
我子は近くに居たりけり
事実は常に人の世の

汝がかくれたる其場所を
隠方知れざりけり
何處に我子かくれしぞ
姿も見えず影もなし
行衛を告ぐる其人も
我心をぞなぐさめん
さても我子の愛らしき
實に燈臺のもとくらき
生涯の上にも知る證を

迷蔵（かくれんぼ）

杜鵑

をさなごの
するどき耳に足曳の
其なかぎやめ何なりし
内まで叫ぶ良心の
くりかへ又くりかへまで
かくなりぬれバ今ハ早
消えてあとなく我生ハ
結びてとけぬ関係の
かくて生命の続てふ

山ほとゝぎハ聞し時
年長けて後其耳も
清き聲にも傾けつ
谺響を四方に響かん、
わが一人との感念ハ
他人の生と今まで交り
何てふことを悟りつ
世の真理をも見なすべし

歌、

クーククーク　杜鵑ハ今ぞ鳴く
クーククーク　その鳴く聲ぞ聞えなり
クーククーク　今鳴く鳥ハ唯一つ
クーククーク　されども今や此鳥ハ
我子をはなして渡り来ぬ　我子ハ見たり郭公
さても所々と飛び来るよ　時ハ郭公とちかひて
クーククーク　何れ我小さき子よ
クーククーク　我　子　供　よ

杜鵑（ほとゝぎす）

玩具店と少女、

子供は店のおもちやを好む
品こそかはれ汝が持つ
その樂も異ならず

歌、

「母上どうぞおもちやへ　今日つれ行きて下されよ
そこに小さき戸棚もあり　又人形の揃ひもあり
人形の家を飾るべき　机や椅子の品もあり
今日は三月の市なれば　賣物は皆かゞやかん
どうぞつれ行きて下されな　其あたらしくきよきもち
我に買はせて下されな」　「いざ行けよ我子供
市のかざりを見に行けよ　されどいざ行く其前に
一言いふべき事ぞある　我伴ふべき少女子は

いつも親切善良の　二つの道を守りつゝ
考へ深く禮あつく　誰からも笑顔向くべきなり
もしさはなくて意地あしく　腹立て安き其時は
直に母の眼をさけて　ならべし市の品物の
その美しきも見えざらん　さらば買物出來ざらん」
「來ませ母上いざさらば　我身はいかに親切に
禮儀正しく喜悦もて　満たされんか見給へや」
「おもちやさんお店の子に　何よかろう」
「よき孃様のおもちやには　式美くしき糸車
はた織道具の外にまた　お臺所に皿戸棚
皆美しくぴかぴかと　光放ちて並ぶなり」
その子の樂よろこびを　増させん為めにおもちやは
奇麗な品物よりいだし　いざと勸めて賣らんとす
「よい子でいふ事よく守らば　欲しいといふ物何なりと
もとめて我子をよろこばさん」

玩具店と少女

玩具店と童児、

歌、

父上よ
杖と帽子を持ち給へ
よき品物を見にゆかん
千里駈けんといさむ駒
店に我身をつれ玉へ」
されどつれゆく其前に
父ある子は悪を避け
心温和に愉快なる
伴ふは父の目に更に
よきおもちゃなる品物も
「いざ伴れ立ちてよ父上よ
御身の仰に従はん」

いざお伴して玩具舗の
このほか羊と牧羊者
どうぞ父上おもちゃやの
「来れ我子よ伴なはん
我いふことをよく聞けよ
教を守り勉強し
其心のけがれざれば
うつくしき物も見えざらん
其子の手には得らるまじ」
今日は殊更おもしろく
「玩具やさんよ汝が店に

正月祝の美しき
子供の好くのがあるときく
買ふべきものは何やらん
よき品撰べ我子が為に」
これぞ我物よりとりて
いといみじき馬などの
勇気起らん其外は
弓ひく矢をば射させて
数限りなきおもちゃは
とくとご覧で御自身に
「さらば我児よ御身は今
よく学で言ふ事よく聞かば
買ふて望を充しめん」、

其品々を持つときく
善き我子供の楽に
よき物見せよ我前に
「三輪車、四輪車、一輪車、
用ひば子供を慰めん
眼を見れば自ら
弓と箭筒は坊様に
力養ふ事を得ん
「一々ここにのべがたし
品々おえらび下さいな」
けふよい物撰ぶべし
坊やのほしいと云ふ物を

玩具店と童兒

會堂の戸及窓

萬のもの皆和合して
色も形も二つなき
聖き調和をなせし時
子供の心も其中に
取りまかれる思ひ一つ
其全体ハ、と篤き
畏敬の念に傾かん
かゝる有様の見えバ
何事よりもいやさきに
子供の心をみちびきて
あらゆる人ハ凡て皆
最上至高の志望にぞ
一致すべきものぞとの
尊き真理を漸くに
感せしめんと勉むべし、
さらバ容易く最上の
樂地に招く通路を
あらハせおしへ導べきなり、
かくて人生最高の
ものをさづくる其時ハ
子供ハ是ぞ上天の
我に與へし賜ものぞ、
保護の力と感ぜつゝ
「子供ハいとも小さし」と
おもふ心をやめ捨てん、
稚き子供の心をば
いともくすしき磁石なり
一致調和のある方に
常に彼をぞ引よする
されども不和の風吹かバ
雲ハ忽ち起るべし、
誰よ子供と諸共に
真の一致を得んと共
汝が切にハすべて皆
彼の光をかゞやかせ

歌、

窓の燈火あきらかに
會堂照して隈もなし
見よ戸ハ今ぞ開かれて
寄り來る人を招くなり
招かれてゆく人々え
かねて用意ぞ怠るな、
今やきけ堂の中
ひゞき流るゝ風琴の
ローラーラーのふし清く
いと美しく聞ゆなり
さて又聞け塔よりハ
集る時を知らせんと
ビンボンベンと鐘の音の
やさしく四方にひゞくなり、
調子やさしき鐘の聲
聖く聞ゆる風琴の
調ハ共にルーローラー、
聞く諸人の其心
喜悦にこそ満さるれ
ビン、ボン、ベン、

會堂の戸

彼に由て我儕二者一の靈に在て父に近く事を得なり

小技術ヶ家

汝が子の示し熟練ハ
いかに小さきものなりとも
我見るものハすべて皆
ものもはじめハいと細き
天に漲る大波も
世界を照らす大の日も
神ハ曰ふ
我幼児ハ此法則
さらバ小さき熟練より
汝が生命と其意志とた

汝がため軽まべきならん
今に大きくなりぬべし
ものられぬほど大なる
塵に起りし時ありき
其源ハ昔の露
ものめハ東雲の露より
最小のものも我に忠なれと
遵守られしを独に得ぬなり、
大きく成るをひろげんため
應用せしめよ此聖語、

歌、

汝が指を我に握らせよ
我等ハ美しき画をかゝん
茲に飛び来る小鳥あり
かゝる小山を打越えて
此又小さき梢には
梅の果熟して汝を待つ
これなる小枝の上見れど

鳥が小さき巣を作る
小家のまはりハどことなく
小鼠が来て走りかむ
我等がのぼる小二階の
上より窓をのぞくべし
屋根の上にハ瓦あり
壁にハ鏡をかけてあり
部屋の中にハ高机
机の上にハ大きな魚
是なる小樽ハ水清き
川の向なたに我を渡さ
茲にハ高き梯子あり
茲にハ仕立屋の鋏あり
茲には高き鳩小屋あり
鳩ハ出入をしつ飛び遊ぶ

小技術家

この雄鶏ハ時をつくり
此小兎ハひとり行く
小さく平たき鼻を出し
坐る兎も我ハ見る
これ鋸ハ利く長く
又この真鍬ハいと強し
用多き藁巻我ハ作り
僕の持つ水さしを我ハ示し
友をうれしく載する馬車に
輻と轂とを持つ車輪あり
日ぞかゞやきつゝふてり
星も愛らしき影をぞ送る
眼の光ハ美しく
夜の星ハ又数多し
星ふれ雪の下ふ咲く

此花形を我ハ知る
夜の空ゆく月かげハ
働く人を照をかり
月ハ形ふ従ひて
其老たるか少きかを
知り得る事も出来るなり
最後ふのぞみ我々は
このねて親む教會の
門を開きていざ入らん

唯これのみに限らで
作りしも我ハいろいろ皆
これを造りし其労
さても子供が眼界を
世界の廣野を見渡せバ
もしや生涯技術家の
絶えざれ利は富みつても

作らるゝとも終りはあらん
盡る時こそ来らめど
永遠までもつきるなし
四方ふひろげて其渡る
如何にあまたの職業の
働くらん其時え
世界ハ常に彼を待つ、

小技術家

結尾の歌

母親が
子供を養ひ
如何なる事を
いとも楽しく
遊戯と唱歌に
其作業に
活気と愉快を
思慮ある母の
つもりて〳〵
千代はいや千代の
幸福となり
幸福となり

育つるには
なす時も
熱心なる
たよりもて
新鮮なる
與ふなり
愛情も
幼児の
末までも
はたらかん
そゑらかん、